青木 裕次
（元青森県立北斗高校校長）

『好きなこと』

TBSラジオ『秋山ちえ子の談話室』のパーソナリティーを昭和32年から平成14年まで、長きにわたって担当したエッセイスト秋山ちえ子氏の著書の中に、こんな話がありました。東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）出身の彼女は、小さい時から優秀であったのでしょう。小学生の頃、担任の産休で代わりの先生が赴任し、初めて教室に来た時、学級の皆に「この中で勉強が好きな人は手を挙げなさい」と問われ、誰も手を挙げなかったので、級長をしていた自分が手を挙げなければと思って、彼女は手を挙げたそうです。その時、その先生が彼女をじっと見て「嘘を言ってはいけません」と言ったのです。確かに成績は良かったのですが、かと言って彼女は勉強が好きな訳ではなかったのです。秋山ちえ子さんと比べようもありませんが、私も勉強は好きではありませんでした。子ども達が勉強を好きになるようにと教師が思っても、なかなかそうはなりません。子どもは遊びが大好きで、勉強は義務みたいなものなのですから。勉強が大好きな子どももいるでしょう。その子を伸ばしてやることは大切な事ですが、それは希なことで、そんな子どもに私は殆どお目にかかったことがありません。小学から大学まで振り返ってみても、勉強を必死に頑張っている人はいましたが、本当に勉強大好きという友達はいませんでした。

私は小さい時、何をやっても長続きしない子どもでした。しかし大きくなるに従って、ギターを弾いたり小説を読んだり演劇部に入ったりと、様々な事に興味がわき出しました。今は亡き母は、ゆとりのある暮らし向きでも無かったのに、家計をやりくりしてギターを買ってくれたり、文学全集を毎月とってくれたりと、私の好きなことに理解を示し協力してくれました。その母曰く「人の道を外れるようなことで無い限り、人様の迷惑にならないものならば、自分が好きなことを続けてみなさい。しかし、好きなことでも苦労はある」というのが口癖でした。母は茶道が嫌いでした。濃茶を何人もの人が一碗で飲み回すことを、非衛生的だと思っていたからです。しかし大学1年の時、縁あって茶道を始めた私の為に、父に口添えをし安物でしたが、薄茶を点てるための一式を整えてくれました。そのお陰でしょうか、お茶は50年以上経った今でも続けていて、私の日常に歓びと楽しみを添えています。文学全集を毎月とってくれた影響でしょうか、幾つかの文学賞を頂き、売れない小説ですが本を出してもらったりしています。教師になって再び触れた青少年赤十字活動も、私の好きなことの一つで、現職時代ずっと拘わってきました。その故あって、東京に移り住むに至り、青少年赤十字関係の仕事をさせてもらい、生活に張りを得ています。好きなことを続けてきて、本当に良かったと思います。

子ども達が勉強を好きになることは、教師冥利に尽きるでしょう。その努力を怠ってはなりませんが、もう一つ大切な事は、子ども達が好きなことを見つけ、それを伸ばして行く手助けをしてあげることも教師にとっての大きな役目ではないかと思うのです。子ども達には、様々な可能性があることを努々（ゆめゆめ）、放念してはなりません。

先日、『ドカベン』の著者水島新司氏が亡くなられましたが、彼は大好きな野球を題材にして漫画家として大成しました。好きなことを持つことこそ、子ども達の人生にとって大切な事であり、素晴らしいことだと、自分の人生を振り返って、今つくづくと私は思うのです。

バックナンバーは本会ホームページでも掲載しておりますので、ぜひご覧ください。